

書評 John Edward Terrell & Esther M. Schechter
2007 Deciphering the Lapitacode : the Aitape
Ceramic Sequence and Late Survival of the Lapita
Face. Cambridge Archaeological Journal
17/1,pp.59-85.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6670

[書評] John Edward Terrell & Esther M. Schechter 2007 Deciphering the Lapita Code : the Aitape Ceramic Sequence and Late Survival of the 'Lapita Face'. *Cambridge Archaeological Journal* 17/1, pp.59-85.

酒井 中

はじめに

インターネットを利用して検索している際に、ラピタ土器の文様の意味を解明したというトピックが目にとまった。それはサイエンスデイリーの web サイトに掲載された記事 (1) であった。その検証方法・結論が気になった評者は論文を入手した。論文はジョン・E・テレル氏を中心とする研究グループがニュー・ギニア北東部のセピック海岸沿岸部で 1990 年代に実施したニューギニア・リサーチ・プロジェクトに関する報告である。

テレル氏 (J. E. Terrell) はシカゴのフィールド・ミュージアムの学芸員、ウェルシュ女史は同ミュージアムで共同研究員を務めている。テレル氏は 1959 年のイギリスを皮切りに、フランス、アメリカでの調査を行なったのち、1960 年代中ごろよりメラネシア、西ポリネシア各地において考古学調査に従事し、著作物も数多い。プロジェクトの成果はこれまでも雑誌『Antiquity』71 巻 273 (Terrell & Welsch 1997) をはじめ、何本かの報告論文を雑誌上で見ることができる。

1. 本論文の構成と内容

論文は 27 ページからなる。大きく分けるとアイタペでの発掘調査で出土したポスト・ラピタ期の土器編年、土器の文様帯構造分析、土器文様の意味の 3 つに

内容が分けられる。論文の構成は以下のとおりである。

概要

背景

文化の表現としてのラピタ

方法および文化の序列

形態の分類

文様帯の構造

セピック海岸におけるラピタの「顔」文様の変遷

考察

結語

「背景」では 1987 年に筆者らがフィールド・ミュージアムの太平洋人類学コレクションの分析を始めたこと、1990 年代にパプア・ニューギニアのアイタペ地方で行なった調査および出土遺物の分析の経過が述べられている。

「文化の表現としてのラピタ」では、ラピタ土器の特徴、民族学・言語学などの成果を含めたオセアニア先史学におけるラピタ文化の位置づけを行なっている。

「方法および文化の序列」では、1993 年以降にセピック海岸で行なった現地調査の概要が述べられている。アイタペの南東に位置する丘陵地帯の尾根で 14 個の試掘坑、トゥムレオ島におい 3 つの試掘坑をそれぞれ発掘している。出土遺物を整理した結果、4 つの土器様式を設定している。放射化炭素年代測定を行なった 13 点の測定値を提示している。室内作業の一環として、フィールド・ミュージアムに所蔵された民具コレクション 1065 点の中から 107 点の木製容器を分析対象として抽出している。

「形態の分類」では、物質文化の様相をつなぎ合わせるために、「4 つの修辭的な特徴 (Terrell and Schechter 2007: 71 l. 17-20)」を解説している。

「文様帯の構造」ではラピタ土器の文様研究史の概略に触れ、セピック地方の土器の文様帯構造を文様帯の概念を用いて解説している。文様帯構造は、排他的 (*singular*)、包括的 (*inclusive*)、入れ子状 (*nested*) の 3 種類に分類している。

「セピック海岸におけるラピタ『顔』文様の変遷」ではラピタ土器の文様とアイタペ地方やセピック海岸などで採取された木製容器の文様に共通性が見られると主張し、それは「象徴的な (*Symbolic*)、想起させるような (*Evocative*)、冗長な (*Redundant*)、提喻的な

(Synecdochical)」ものであるという。

「考察」ではラピタ土器に描かれた「顔」文様を構成するパーツとウミガメのさまざまな部位や近・現代の木製容器に見られるウミガメの彫刻と比較することでウミガメの顔を描いたものであり、この図像が現代に至るまで描かれ続けてきたという主張を展開する。

「結語」では前章での主張をあらためて提示し、その背景には、南太平洋島嶼民が維持してきた宇宙観が存在し、ニュー・ギニアに伝わる民話（付編を参照）がそれをよく物語るとしている。アイタペ地方においてはカメに関する観念・知識・儀礼において、時代とともに文様が変化し、「顔」の図像は「目」や「カメが砂浜を這いずった軌跡」であると結論付ける。

2. 提示された資料

資料整理の結果、設定された土器様式は以下の4つである。

ニャピン土器：

外面に赤色スリップが施された鉢と大皿からなる。細かい切り込み・沈線文・波状文もしくは棒状工具・貝殻腹縁工具による圧痕文が施されることもある。外面に施された文様は、隣接する文様帯あるいは区画に分割されるようである。鋸歯状押印文による区画文様帯が施されているものもある。「眼」をかたどった図像が鉢・大皿のいずれにも見られる。大皿には棒状工具による圧痕文で「眼」を表現したと思われるものが見られる。「眼」の図像の上には貝殻腹縁の押印・短い沈線による格子文様帯が施される

スマロ土器：

赤色スリップが施されている。施文された土器はごく少量（3%未満）である。施文技法は端部が平ら、もしくは膨らんだ棒状の工具、あるいはラピタ土器と同様に、歯が大きな鋸歯状工具によって外面の一部を刺突または押印である。モチーフは波状もしくはランダムな押印文がしばしば見られる。ニャピン土器の鉢のものより大振りな「眼」が描かれ、大皿の場合は「眼」は窪みによって表現される。「眼」の図像の上には押印・窪み・刻み目による文様区画が施される。

アイサー土器：

通常、鉢は赤色スリップが施される。交差沈線・窪み・粘土粒貼付・刻み目を持つ粘土紐の貼付といった施文技法が単体または複数用いられる。格子沈線文は、容

器の下の方に描かれる。口縁外面に突起を持つものがあるかもしれない。

ウェイン土器：

赤色スリップは施されない。窪み、沈線文、斑点状あるいは沈線で描かれた綾杉文が施され、まれな粘土粒の貼付が見られる。

施文領域は二重の沈線で区画されることがしばしば見られる。口縁端部はやや厚みがあり、平坦である。口唇部または口唇部直下に窪みを持つこともある。

ラピタ土器に見られる各種の「顔」文様はスプリッグス (Spriggs 1990) やカーチ (Kirch 1997)、サンド (Sand 1999) などの論文からの引用であり、これまでも様々な論文に引用されている。これらの図と博物館のコレクションからカメの意匠がある木製品の写真に加え、実際のアオウミガメのさまざまな写真や図と対比させ、自論を補強している。

文様帯の区分概念図 (fig.16-19) を掲載しているが概念提示にとどまり、実際にラピタ土器の文様帯構成を検証しているわけではない。

3. 年代

紹介されている土器は前例がなく、遺跡の層序と出土状況に関する記載が記載されていないため（評者がいまだ目を通していない論文に記載されているのかもしれないが）、年代測定値の妥当性は検討できない。ただし、ラピタの後続型式として設定されたニャピン土器は1遺跡でしか出土しておらず、ラピタ土器もしくはスマロ土器とは時期的に重ならないといえるかは、追検証を要すると思われる。それ以前に、ニャピン土器・スマロ土器ともに鋸歯状押印による施文がなされているという点からして、著者の言うところの「未知のラピタ土器 (Terrell and Skecher 2007: 7 6 1. 14-15)」である可能性も現状では完全には否定できないように思われる。さらに残念なことに、トゥムレオ島・セピック海岸の両地域で出土しているウェイン土器の年代測定値は論文の中では公表されていない。

4. 土器文様帯の構造

ラピタ土器の文様をテーマとする、これまで研究の多くは図像学研究的なもの、またはその図像を型式的に配列したもの (Spriggs 1990; Ishimura 2002) な

ど)有名である。こうした背景には、これまでに出土した多くのラピタ土器が接合もままならない、微細な破片である場合が多いこと、報告書が刊行されない、あるいは現地の博物館に提出するにとどまり、情報の共有化が進んでいないことに起因しており、そのためか器形や成形技法、器種構成に関する研究はあまり進んではいない。遺物の遺存状況については1996年のWKO013A遺跡における一括資料の出土以降、完形土器の出土例は増えているものの、報告書の刊行が待たれるところである。

論文中では、Fig.17に見るように、時間の経過とともに、多数の文様帯からなる写実的な図像が、より少ない文様帯で構成される抽象的な図像に変化していくと主張しており、写実的なものが抽象的なものに変化していく流れは、これまでに為された文様研究の成果とも矛盾しないのだが、筆者が主張するように、近・現代の民俗資料に同じ図像が見受けられるのだとしたら、抽象化して、その意味すら不明になりつつあった図像が、再度写実的になり、本来の形よりもさらに写実的になっているという矛盾を生むのだが、これについて筆者はどのように考えているのかが疑問である。

5. 解釈

著者はこれらの文様要素が全てではないにせよ、アオウミガメを表象した物であると結論付けるわけであるが、それでも土器に施された文様要素の多くがウミガメに起因することになる。しかしながら、ラピタ期の中でも最も古く位置づけられるタレパケマライ遺跡出土の資料ではカメは「顔」の両隣に配置される。本文中ではウミガメの甲羅や「眼」に対比されているメダル状の文様 *medallion* も「顔」文様の両脇に配置されることが多い。(日本語では綾杉文、矢羽文と呼称される)一部の幾何学文で構成される文様帯を「カメが砂浜をはいずった軌跡」と解釈しているのだが、こうした幾何学的な文様帯は世界中に普遍的に見られるはずのものであり、南太平洋地域に限定して見られるものでもない。また、南太平洋島嶼民の宇宙観をあらわすものとして引用されたウミガメにまつわる民話(付編を参照)も、果たしてラピタ期に成立したものであるのかどうか定かではない。評者には、「顔」文様をウミガメとしてみるには、まだ十分な証拠がないように思われる。

付編：「カメと島」(Stokes & Wilson 1978)

昔々、カメが歯を持っていた時代、すべての海カメの母親である偉大な海カメが暮らしていた。彼女は現在、人間が太平洋と呼ぶ広大な海を泳いで過ごしていた。海に暮らす魚や生えていた海草を餌とし、岸辺の岩に潜んだ魚貝類をかき集めながら彼女はゆっくりと泳いだ。彼女は、広大な海の端から端まで泳いだ。彼女は海の中で暮らしたが、彼女は海面の上と下の両方で泳いだ。海面上で、彼女は澄んだ新鮮な空気を吸い、太陽の暖かさを感じた。彼女は空を見上げ、日中は太陽を、夜には月を眺め、海を渡る鳥を眺めた。彼女は海中を見下ろし、その暗く寒い深みを眺めた。時々、カメは泳ぐのに飽き、海面のすぐ下で休息を取るが、暖かな日の光がさす中での休息を好んだ。彼女は、自分が暮らす大きな海の真ん中に1個の土地があれば楽しいのに、と思っていた。

カメが暮らしていた海のずっと下にある、暗く人目につかない洞穴の中に一人の男が暮らしていた。肌は黒く、広大な海中で、彼は唯一の人間だった。妻、子供、部族の人間はいなかった。海底の洞穴の中で彼は孤独だった。彼の心は海岸の石のように重かった。彼はひとりぼっちでいることに飽き飽きしていた。

ある日、カメが泳ぎ回っているうちに、海の真ん中にある場所にやってきた。そこは海底から上昇した砂でできた、大きな丘でした。その丘は非常に高く、頂上は海面上にほぼ達していた。

「この大きな丘にもっとたくさんの砂を足してやれば、すぐに海面上にはっきりと現れるだろう。太陽は、日中は丘の上に日差しは降り注ぎ、水泳に飽きたとき、休息をとったり、暖かく澄んだ空気を楽しめる場所になるだろう。」とカメは考えた。カメは海底の別の部分へ行き、岩や砂を掘り返しては丘へ運んだ。その結果、丘はますます高くなった。彼女は何度もこれを繰り返した。来る日も来る日も、日は昇っては沈み、月は満ち欠け、丘はなお高くなった。ついに、それは海の真ん中にある巨大な島になり、カメは作業が完了したと判断した。

そして、陸から陸へ海を渡る鳥が植物や木の種を運び、その島に落とした。草や花を咲かせる植物、背の高い木が芽を吹き、岩や砂を覆った。それは大小の魚に富んだ海に囲まれた、美しく肥沃な島だった。

カメは、彼女が作った島の、太陽に暖められた土地で

休んだ。もはや、彼女は広い海を泳ぎ、海面下で休む生涯を過ごさなくてもよかった。それでも彼女は以前のように泳ぎ回ったが、決して島からあまり遠には行かなかった。

ある日、彼女は海底へ潜った。彼女がこれまでに泳いだことがあるよりも、はるかに深く。そこは何と暗くて冷たく、太陽の光や暖かさというものから遠いのか！にわかに、カメは黒い肌の男が長らく一人で暮らしている洞穴に泳ぎついた。カメが彼の元へ来た時、彼は大いに喜んだ。男は、相手となり、子供を産んでくれる妻を見つけてくれるよう、彼女に懇願した。カメは彼が孤独なことに同情した。彼女は、男を甲羅に乗せて、島へ連れて行った。そして彼女は最寄りの土地へ海を泳いで渡った。そこには一人の女が立っていた。女は黒い肌で美人だった。彼女は涙ぐんでいた。男と同様、彼女は孤独だった。彼女は夫を欲し、子供を産むことを切望した。そこでカメは、女を連れて島へと戻り、男に女を妻として与えた。

男と女は、幸福に島で暮らした。彼らは笑い、海で遊び、ときどき喧嘩した。しかし、彼らは心の中では、決して喜びを失わなかった。彼らは子供を作った。美しい、黒い肌の子供を。その子供たちは、よりたくさんの子供をもうけた。このようにして、島は作物を育て、家を作る人々でいっぱいになり、海辺で魚を獲るようになった。やがて、偉大な海カメが作ったその島は、ニューギニアとして知られるようになった。

註

1. <http://www.sciencedaily.com/releases/2006/12/061213104214.htm>

参考文献

Ishimura, T. 2002 "In the wake of Lapita: transformation of Lapita designs and gradual dispersal of the Lapita peoples." *People and Culture in Oceania* 18 pp.77-97

John Edward Terrell and Robert L. Welsch 1997 "Lapita and the Temporal Geography of Prehistory." *ANTIQUITY* 71:548-572.

Edward Terrell 1999 "Lapita for Winners: Getting of the Lapita merry-go-round and living without compulsive à habits." In: Jean Christophe Galipaud et

Ian Lilley(eds.), *Le pacifique de 5000 à 2000 avant le présent. Suppléments l'histoire d'une colonisation. The Pacific from 5000 to 2000 BP. Colonisation and transformations*, pp. 49-59. ORSTOM. Paris.

John E. Terrell Robert L. Welsch 1997 "Lapita and the temporal geography of prehistory." *Antiquity* 71 pp.548-572.

John Edward Terrell 2004a. "Introduction: 'Austronesia' and the great Austronesian migration." *World Archaeology* 36/4 pp.586-590.

John Edward Terrell 2004b. "The 'sleeping giant' hypothesis and New Guinea's place in the prehistory of Greater Near Oceania." *World Archaeology* 36/4 pp. 601-609.

Kirch, P.V. 1997. *The Lapita Peoples: Ancestors of the Oceanic World*. Cambridge: Blackwell.

Sand, C. 1999. *Lapita: the Pottery Collection from the Site at Foué, New Caledonia*. Nouméa: Département Archéologie, Service des Musées et du Patrimoine de Nouvelle Calédonie.

Spriggs, M. 1990. "The changing face of Lapita: transformation of a design." In Spriggs, M. (ed) *Lapita Design, Form, & Composition: Proceedings of the Lapita Design Workshop, Canberra, Australia - December 1988*. Canberra: Department of Prehistory, Research School of Pacific Studies, Austrarian National University.